

随想

# 雷龍の恵み 西水美恵子

前世界銀行副総裁 西水美恵子

世界銀行の現場での思い出を本『国をつくるという仕事』英治出版版にして、いろいろ思いがけない読者からいただく反応に驚いている。驚きの筆頭がグルメな読者。貧困のない世界を創ることを使命とする世銀の顧客は、全世界の貧民。お客様を深く知らずに良い仕事はできないから、担当国の離村やスラム街の「視察」はやめて、ホームステイに徹した。その体験を綴った一章で、プータンの伝統的な家庭料理を紹介したからだ。

滞在したベムジ村は、あの国では離村の内には入らない。それでもプータンの中部まで車で丸一日旅し、二日目は、峡谷を二つ越える険しい山路を標高三千数百メートルまで登った。日没前やっとたどり着いた村には、越冬支度を整えた喜びの時間が流れていた。千枚田を渡る秋風に、山椒の薫りを聞いた。

古代米の赤米を作る農民の衣食住は、自給自足に近いとはいえ、予

想を遙かにこえて豊かだった。民家は農家と呼ぶには大きすぎて、英国の片田舎によく見かける小荘園主の邸の風情。家畜用の一階は、分厚い土壁の白い漆喰に眩しい。住居にあてられる二階と客室や仏壇のある三階は、釘一本使わない木組み様式。屋内はもちろん、外の壁や窓枠にも、色とりどりの八宝吉兆紋が躍っていた。

洗面は井戸端ですますが、バケツの水で流すとはいえ水洗式の室内便所には驚いた。贅沢な露天風呂も楽しめる。真っ赤に焼いた岩石をヒマラヤ杉の風呂桶に投げ込む。ジュエツと大きな音をたてて蒸気が飛ぶ。鉱物成分が溶け出たところを見はからってネズの実と葉を浮かべると、諸々の病に効くと教わった。

野良仕事にさえ手織りの民族衣装を纏う村人のこと、見事な正装姿には目を見張った。が、仰天したのは、食生活だった。

懐かしい山椒の佃煮。ヤク（梨牛）のチーズと唐辛子を絡め、生姜バターで炒めた茸。ほんのりと不思議な苦みが残る蘭の蕾のおひたし。そして、川藻の香りが清々しいおすまし。赤米のご飯を片手にぎり、おかずを添えて、にぎり寿司の要領で口にほうりこむ。

野良仕事で疲れた時は、蘭や寄生木の葉を茹でてヤクのバターをたっぷり溶かし、岩塩で味つけたバター茶で生き返る。自家製の焼酎や濁酒も美味しい。夕食後の憩いの時には、アバ（お父さん）が「精力がつかから要注意」と笑いながら、卵酒を振舞ってくれた。

どれもこれも思い出ただけで頬が落ちるけれど、忘れられないのは、そばがき。私の大好物が蕎麦だと知ったアマ（お母さん）が、心

を込めて作ってくれた。

蕎麦は峠をひとつ越えた高原で栽培される。米の不作に備えるのが目的だから、収穫の殆どは焼酎と家畜の餌になる。有機栽培どころか純粋な自然栽培の蕎麦の実も、宝石のように光っていた。アマが、一握りずつ石臼でゆつくり挽いてくれた蕎麦粉は、しっとりとして香り高かった。山頂の泉から落とす甘露を沸かして混ぜ、熱々を手早く丸めて、くぼみをつける。そこに溶かした唐辛子バターに、一口ずつ、

ちぎったそばがきを浸けて食べる。デンゴと呼ぶプータン流そばがき。もっちりした食感が、それはそれは見事だった。

「デンゴを小さめにして川藻のおすましに浮かべ、山椒の粉をほんの少しふりかけたら、日本料理になる」とアマに言ったら、早速試作してくれた。その豊かな風味に、アマはただ涙。アバは「この世のものとは思えない」と喜び、プータン本来の国名ドワルク・ユル（雷龍の国）にちなんで「雷龍の恵み」と命名した。後日、和流そばがき「雷龍の恵み」は、蕎麦と川藻のおすましがお好きな国王陛下、雷龍王四世に、献上されたと聞く。

古来、民が薬と尊重してきた山椒や苦蕎麦も、甘蕎麦と同じく世界の風味を誇ると思う。その山椒や蕎麦で「故郷の村起こしと国づくりを」と夢みる友が、あの国にいる。彼の夢が、奥深い食文化を誇る我が同胞にも幸せを恵む日の到来を、祈ってやまない。

### 西水美恵子（にしみず・みえこ）

大阪府豊中市に生まれ、北海道美瑛市で育つ。中学校3年から上京。東京都立西高校在学中、ロータリークラブ交換留学生として最渡米。そのまま帰国せず、ガルチャー大学へ入学し経済学を学ぶ。1970年卒業後、トーマス・ワトソン財団フェローとして帰国し、翌年留学のため再度渡米する。

75年ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程（経済学）を卒業。プリンストン大学助教授に就任するが、エジプトの貧民街で遭遇した体験から学窓を捨てる決意。80年世界銀行に入行し、2003年に副総裁として退職するまで貧困解消の夢を追う。

現在、米国首都ワシントンと英国領バージン諸島に在留。世界を舞台に、就筆や、講演、様々なアドバイザー活動を続ける。

<http://www.sophiabank.co.jp/japanese/> 著書その他の詳細あり。



岩手山麓の地吹雪（高寺 志郎）

\*西水美恵子さんの著書『国をつくるという仕事』は、かばんの中の一冊コーナーでご紹介しています。